

産業構造審議会製造産業分科会車両競技小委員会(第20回)

議事要旨

1. 日時

令和7年5月22日(木)14:30~17:00

2. 場所

経済産業省本館17階西6第2特別会議室及びオンライン開催

3. 出席者

山本将利委員長、奥野史子委員(オンライン参加)、奥野美奈子委員、藤岡良一委員、松田美幸委員(オンライン参加)、山下真輝委員、秋谷美隆オブザーバー、浅野忠久オブザーバー、今成貞昭オブザーバー、川島聡オブザーバー、木戸寛オブザーバー、中野光公オブザーバー、平石克巳オブザーバー(オンライン参加)、安祐一オブザーバー、安田光義オブザーバー、山本康平オブザーバー(オンライン参加)

4. 議題

- (1) 競輪・オートレース業界の現状と課題
- (2) 競輪事業の第3次中期基本方針の骨子案について
- (3) オートレース事業の第3次中期基本方針の骨子案について

5. 議事概要

- 議事に先立ち、事務局から、会議及び配布資料公開とすることを説明。
- その後、山本委員長より、議題に沿って進行。
- 事務局、(公財)JKAから説明があった後、委員から意見が述べられた。主な意見は以下の通り。

選手の労働環境

- 開催日数の増加に伴う選手への負担、労働環境が気になる。もちろん、開催日数が増えることで売上が上がることはそのとおりだが、過熱しすぎないようにするべき。
- 今後、女性選手専用宿舍の建設が増えてくるという期待の一方で、今まで男性選手と同じ建物を共用していた状況は女性選手にとって厳しいものであったと考える。
ガールズケイリンはこの10年のリブランディングを経て、今やレース数の増加や売上げへの寄与は無視できない状況であり、女性選手を育てる環境整備という観点から滞在環境の改善に着実に取り組んでいただきたい。

競技人口・選手養成

- 競輪選手、特に女性選手はこの10年で人数がかなり増加した。今まで増やすためにかかなり努力されたと思うが、今後どこまで増やしていくのか。どのような人達をターゲットにしていくのか。
- スポーツツーリズムの観点からは、担い手たる選手の確保が大事。スター選手、トップ選手の育成に加えて、どう裾野を広げていくかも考えなければならない。そのために子供や学生が競技と触れ合う機会をどう作って行くのかという視点も必要。広島競輪では、アーバンスポーツ、サイクルスポーツと

の融合はあったが、そもそも競輪選手の増加にどうつながるのかといった議論も必要。トップアスリート・選手の育成とあわせて全体的な裾野の広げ方も考えていくべき。

オートレースにおけるカーボンニュートラルに向けた取組

- 合成燃料は 2030 年に商用化を目指しているとのことだが、先行的にオートレースでテスト運用も含めて取り組んでいるという姿勢を発信すべきではないか。
- 経産省の合成燃料の国産化に向けた取組は承知。その進捗は注視していく必要がある。また、オートレースは「音」という視点も大事。電動化をすれば静音化によりレース場周辺への影響も軽減されるのではないか。極端に言えば無観客のナイト開催の比重を高めればもっと収益が伸びるのではないか。コロナ禍の 2020 年の収益が伸びたのは、無観客で経費が抑制されたことが要因と考えると、電動化への取組、また可能な範囲で静音化を図っていくべきではないか。欧米も内燃機関から EV にシフトしている。

インバウンドへの対応

- インバウンドの取込みという観点も大事。ネット販売の普及に合わせて表記の多言語化に加えて、日本に滞在する外国人へのアピールも上手に発信していくべき。
- インバウンドは次期方針にも記載があるが、自転車競技は欧州ではアイデンティティが高いスポーツ。長期滞在型のスポーツ娯楽として欧州への働きかけも取組の一つと思う。
- インバウンドは、地道・長期的戦略が必要。例えば、国内在住の外国人が youtube でインフルエンサーとなり、情報発信しながら海外旅行会社や海外メディアを招聘して、紹介してもらうような取組が必要。グローバル化すると、国内の若者にも裾野が広がるので、いい循環になる。
- インバウンドについては様々な話があったが、リアル、ネットと両方あるが、業界全体としての取組み方針も必要。

競輪の認知度

- 競輪の選手は世界大会などで活躍している。その認知度はどうか。競技力が高く、立派な成績も収めているので広く周知すべきであり。広報を頑張っていただきたい。

事業運営全体

- 事業の持続可能性を確保していくことは最も大事なこと。また、第 3 次中期基本方針の骨子案に記載されている社会還元、地方財政への還元は、大きなテーマ。現状の課題解決の柱にまとめてもらった全体の構成やそれぞれの取組についてはこのまま進めていただきたい。
- 2016 年以降の様々な取組のなかで、社会変化、ネット投票が進み、顧客取引分析がなされ、新たな商品提供をされていることは、とても前向きに取り組んでいると思う。
- 競輪・オートレース業界は好循環にあると思われる。1期は売上低迷期につくられた収益悪化状況の克服、2期は施行者収益の大路線、次期(3期)は競輪開催を通じて人々の心を動かし非日常を提供するということがより明らかな中期基本方針となっている。
- 施行者収益を前提とする観点は引き続き重要。自治体財政への繰入額も増えていると思うが、施設改修の課題について、具体的な数字をもって示すことが出来れば、自治体にとっても事業の意味や財務的課題が見えてくるのではないか。

補助事業・社会還元

- 検診車や福祉車両のPRは成功していると思うが、3 期目のミッションを考えた時、競輪を通じて非日常の提供、メジャースポーツとしての価値を高めるということを考えると、社会還元の方向性について、従来の地域との関係づくりや福祉分野への還元以上にスポーツや若い世代への教育といった点への還元も重要になる。例えば若い世代を育てる e スポーツの学校への支援などもメニューにあっても良いと思う。また、取り組んでいる事業の紹介を若い世代に響く表現を用いた広報も必要。
- 地域貢献と社会還元が公営競技の最大目標。JKA の補助事業の他に施行者自身が行う地域還元も行われているがその具体的な実績・事例を業界として発信していく必要もある。また、売上げを原資として行われる施設改修についても同様と考える。

選手への賞金の支払い方法

- 選手への賞金の支払いにおけるキャッシュレス化の検討も必要。運営事業者側の経費削減をいかに図っていくか、そして今後必要となる基幹システムの改修への投資資金をいかに確保していくかという観点も大事。

プロモーション

- 競輪というスポーツで生きていく選手やより活躍して世界へ出て行く選手を業界として支えることが大事。本場での選手とのコミュニケーションや地域における応援、ファンクラブといった取組はオートレースでも言及があったがより一層拡大していくことが重要。
- 若者はネット販売中心で来場しない傾向とある。例えばプロバスケットボールのBリーグでは来場が増えているが、そこではアリーナをライブ会場化しており、エンタメを見る感覚での来場も増えている。生の迫力はあると思うが、如何に本場に行くかといった「意味」を求めるべき。今のスタジアムアリーナは、イベントなどを開催しつつやるなど、ホスピタリティプログラムを作って、飲食して、競技を観覧して選手と触れ合う。ラグビーでもそれがある。多様な見方があっても良い。
- 施行者である自治体との関係が大事だと感じた。財政的な支援、税収還元のみならず、地域振興にどう活かすか、開催自治体に寄り添った地域振興プログラムがあっても良いのではないかと。

ガールズケイリン

- ガールズケイリンのリブランディングで良くなっていくと思うが、レース数と売上の伸びはどうか。レースに出て賞金で食べていくようにするのと、選手育成して食べていけるものにするのと、違う意味でレースの構築が必要と感じた。全体と比較してどうか。女性選手を育てて、食べていけるという点で要検討だと思う。
- 選手数が現在、201 名となっている。選手確保が難しいなか、どのように確保していったのか、また最終的にどこまで選手数を増やすつもりなのか、どういった方が選手になっているのか、教えてもらいたい。

※なお、本議事要旨については、速報性の観点から発言者の確認は取れておらず、後日発言者の確認が取れたものを修正版として予告なく差し替える可能性があることを申し添えます。